## 慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

| -                |   |
|------------------|---|
| Title            | 詩歌における「月」の感傷的イメージの成立:「望月思郷」を中心に   |
| Sub Title        | A sentimental view of the Moon in Chinese poetry : Moon and birthplace                            |
| Author           | 許, 曼麗(Hsu, Man-Li)  |
| Publisher        | 慶應義塾大学藝文学会  |
| Publication year | 1989  |
| Jtitle           | 藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.55, (1989. 3) ,p.223- 243             |
| JaLC DOI         |   |
| Abstract         |   |
| Notes            | 西村享教授退任記念論文集  |
| Genre            | Journal Article   |
| URL              | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00550001-0223 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって 保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 詩歌における「月」の感傷的イメージの成立

「望月思郷」を中心に

許

曼

麗

言

前

「楊柳識別愁、 千條萬條絲」と、 孟東野が「古離別」に言う楊柳には数え切れないほどの絲がある。 その依々たる絲

いることはすでに論じた ①が、 その他にも楊柳と同様に 別離の詩作によく登場し、 の多いさまはまさに別離を目前とする人々の「萬般心思」の照り映しであろう。楊柳が別れの歌に大切な役割を果して 欠けてはならない大切な素材があ

る。

齊

張融

白雲山上盡

別詩

清風松下歇 清風松下に歇む 白雲山上に盡き

欲識離人悲

離人の悲を識らんと欲せば

## 孤臺見明月 孤臺に明月を見よ

それは 中国には数々の「月」に関する詩歌がある。 . 「月」 である。 別離をテーマとする詩作を考える際、 詩歌の素材として、月は最も大衆性を持っているものの一つであると考 素通り出来ない素材の一つである。

金陵城西樓月下吟

李白

えられる。

金陵夜寂涼風發 金陵夜寂として涼風發し

白雲暎水搖空城 白雲水に暎じ空城を揺がし獨上高樓望呉越 獨り高樓に上り呉越を望む

月下沈吟久不歸 月下沈吟久しく歸らず

白露珠に垂れて秋月より滴らす

白露垂珠滴秋月

解道澄江浄如練 解道す澄江浄きこと練の如っ古来相接眼中稀 古来相接し眼中稀なり

令人長憶謝玄暉

人をして長へに謝玄暉を憶はしむ

月夜杜甫

遙憐小兒女 遙かに憐れむ 小兒女の閨中只獨看 閨中 只だ獨り看ん今夜鄜州月 今夜 鄜州の月

未解憶長安 香霧 雲鬟濕い 未だ長安を憶うを解せざるを

香霧雲鬟濕

清輝玉臂寒

清輝 玉臂寒から

N

双び照らされて涙痕乾かん 何れの時か虚幌に倚り

雙照淚痕乾 何時倚虚幌

望月懷遠

張九齢

海上生明月 海上 明月生じ

情人怨遙夜 天涯共此時 情人 天涯 遙夜を怨み 此の時を共にす

竟夕起相思 竟夕 起きて相思ふ

月を見て、 るときは、 あると思われる。 古の人を偲んでは思いを歌に寄す。 物思いに耽けり、 月を眺め、 故里を思い出しては悲しみに沈むこともあれば、 そして、 触発されて、 そして、自分の心境を古人に托す。中国の「月」 何かを歌う。 このような情景は、 家族や友人を懐しむこともある。 中国 人の誰もが共感出来るもの の詩は、 このような図 またあ で

牀前 開月光 牀前明月の 光り 式で扱われるものが多いので、

どれも哀愁の情に充ち溢れている。

その哀愁の出所のほとんどは

「望郷」

である。

**擧**頭望山月 疑是地上霜 頭を擧げて山月を望み 疑ふらくは是れ 地上の霜 かと

-- 225 ---

このような「望月思郷」という心情は、むろん現代中国人も古の人と同じように持っている。 「静夜思」の短い二十文字を通して、 遊子望郷の情をうまく月に投影し、千古の絶唱となったのである。 中国人ばかりでなく、

中に、 ある。 当然このような情それ自体は持っているのだが、それを月と結びつけて詩に詠みこむことはあまりないようである。 後代に伝える。 うに、 西洋では必ずしも同じような感情を湧きたたせるとは言えないようである。 じ心情を詠っていると思われる。このように、月に対して、中国も日本も、ともに似たような感情を抱いているのだが、 安倍仲麿の 日本人も同様に、 とになる。 うちに、 あ 各民族にはそれぞれ独自の月に関する信仰、 叙景歌あるいは抒情歌として、いずれも厖大な量が採り上げられていることは、 まの原ふりさけみれば 一種独特の月に対する感情が形成されると思われる。そして、その感情を詩歌に詠みこみ、文学作品として、 つまり、 「もろこしにて月をみてよみける」と題して、古今集に収められているこの一首も、 後代の人がそれを学習することによって、 古い時代から月をこよなく愛し、月を眺めては様々な思いを喚起させられたのである。 一種の感情の学習とも言うべき手続きによって、各民族の月に対する心情が出来あがるわけなので 春日なる三笠山にいてし月かも 或いは神話や伝説がある。 月に対するイメージを自分の中に確固たるものにしていくこ 例えば、「遊子望郷」 そのようなものを語り伝えていく過程 その事実を物語っている。 李白の「静夜思」と同 の情など、 勅撰和歌集の 思

この中国的

「望月思郷」

という感情だが、

体、

いつ頃に出来たものだろうか。

月と望郷とはどう結びついた

る信仰、 のだろうか。その感情の学習過程を辿ることは出来ないものであろうか。それを解明するには、やはり、まず月に対す 或いは神話や伝説などが、どのように詩歌に反映されているのかという観点から推論していくしかないと思わ

れる。

月と、 月は古く詩経の時代からしばしば詩に登場する。 時間の流れを表す歳月の月であることがわかる。 詩経の月の詩を追っていくと、その大半が一月、 これに対して天体としての月をさすものはわずかに六首とすく 二月など暦の上の

月出 陳風 ない。

しかし、

その中の三首は大切な意味を含んでいる。

勞心悄兮 舒窈糾兮 月出皎兮 佼人僚兮 言もなく心いたみぬたおやかの姿よ 月いでてさやかなり よきひとのうるわしさよ

月出皓兮 **佼人懰**兮 よきひとのうるわしさよ 月いでて冴えたり

勞心 経 受 受 受 胸さわぎ心いたみぬ

たおやかの姿よ

勞心**慘**兮 舒夭紹兮 月出照兮 維其卒矣 漸漸之石 曷其沒矣 山川悠遠 (上略) 漸漸之石

月いでて照れ

よきひとのうるわしさよ

うれたくも心いたみぬ たおやかの姿よ

小雅魚藻之什

武人東征 俾·月·烝 滂·離·淡 沱·于·波 矣·畢·矣 有豕白蹢 月みれば畢にかかりぬ川波をすすみて渉る 豕あり もののふの東にゆきて またしても雨しげから 蹄が

Ē

なにごとの暇だになき

武人東征 不皇出矣 いつの日か尽きむ山川はるかに お けわしき巌 この山路出でむ暇なき もののふの東にゆきて お それ **岁**がし

小雅鹿鳴之什

如 如 月之恆 日之升 日の昇るがごとく月のみちゆく如く

如南山之壽 南山のいのち永きがごとく

不驀不崩 かけず崩れず

如松柏之茂

のである。『淮南子』の「天文訓」に が水や湿気を支配すると信じていた。 よって、月の色が変わる。その微妙なる色の変化が雨をもたらすか否か、或いは降雨量の大小を左右する。古代人は月 という信仰が伺える。月と水との関係は、はやい時期から古代人の注意を引いた。雲霧霞靄などが月にかかり、それに 「月離于崋」という表現は「月と水」に関する信仰に基いており、 無不爾或承 子孫いやつぎつぎに継ぎゆきまさむ\*+ホッの茂るがごとく 従って、 (右三首 水と関係ある産物もまた月の盈虚によって支配されると古代人は考えた 目加田誠訳 龍溪書舎

積陰之寒氣爲水、水氣之精者爲月。

(積陰の寒気は水と為り、水気の精なる者は月と為る。)

月者陰之宗也。是以月虚而魚腦減、 月死而嬴蛖膲

(月は陰の宗主、そこで月が虧けると、 (陰性である)魚の(脳はらわた)が減り、虧けはてると鸁蛖(はまくり)の肉がやせる。) 楠山春樹訳、 明治書院

「天保」と「月出」の二首の背後には「月と不死」

とある。 「墜形訓」

(蛤、蠏、珠、龜は蛤蠏珠龜與月盛衰

蠏、珠、龜は月と與に盛衰す。)

俾滂沱矣」(月が畢星の座にかかっているので、きっと大雨が降るだろう)もまさにこういう信仰の一斑を示すものと言えよう。 と言っている。これらはすべて「月と水」という信仰を示していると思われる。 詩経「漸漸之石」に出る「月離于畢、

釋天、 朔、 蘇也。 月死復蘇生也。 また、古代人は月の盈虚を月の生死そのものだと思っていたのである。

は、何もかも神秘的に見えてしまい、それは神の仕業だと考えた古代人にとって、月の生命力は、文字通り驚異的であ は永遠の生命を持つものであると信じたのであろう。 月が欠けていくのは、 皎と照らす月を眺め、 ったに違いあるまい。 その光りを浴びることによって、寿命が延びるのではないかと考えたと思われる。 月が死んでいくことであって、これが再び満ちてくることは、生命の復活だと考え、そこから月 しかも、古代人は現代人に較べれば、より限られた平均寿命しか持たないのだからなおさら、 自然科学の法則を発見する前において、人間の力の及ばないこと 一種の感染呪

ただ漫然と無意味に月を眺めたのではない。 「月をみる」ことが、一つの大事な行事であったと考えられ

釋天、 望、 月滿之名也。 月大十六日、 小十五日、 日在東月在西、

遙相望也。

る。

術なのである。

230 -

の

日の

-|は「みる」、「ながめる」などの意味を持つ以外、祭の名でもある。

『廣雅』の「釋天」に

望、

祭也」とある。

満月

詩作表現の上では、 という言葉が月を形容するときの常套表現となり、 とで思い悩む、 し共感が底流している。 の手に触れることが出来ないのを歎くあたりに、一抹の哀愁が感じられないでもないが、全体的には一個人が恋人のこ る美女は巫女であって、 垣によるものと考えられる。 された十首ばかりの歌もほとんど歌垣によるものと考えられる⑤。「月出」は月に関する行事、しかも夜に行われた歌 陳とは楚の国の近くにある国で、 沈みがちな調子というよりもむしろ、村の青年達のどちらかと言うと、 この詩に負うところが多い。 この歌は、 のちの月の詩に大きな影響を与えたとつとに指摘されている(4)。 しかし、 月の詩に哀愁がこもるのもこのあたりから始まるという。 月を借りて、 悲しみ憂いを歌うのちの詩作には、 明るいイメージの共同意識ない 「皎」「皓」 確かに、 詩経 一照

げに見えるのは、 をめぐる行事の一斑を覗かせてくれたところにあるということである。 「姮娥奔月」という伝説とを生み出したのも、 「月出」 には見出せない感情があると思われる。 このような伝説、 風習が生まれたからこそ出来たものであると言えよう。『楚辞』 そのもとはこの この詩が持つ最も大切な意味はやはり月に対する信仰、 「月と不死」という信仰なのである。 のちの世に至り、「拜新月」(5)という風習と、 の 月が何となく悲し 「天問篇」に お よびそれ

のこ

231

の

死 夜 則 光 又 何 育 德 死すれば則ち又育す 夜光は何 の 徳あって

厥

維

何

厥の利は維れ何ぞ

而

顧兎在腹 利

而して顧兎

腹に在る

と言っている。 「渉江篇」 には「與日月兮齊光」(日月と光をひとしくしよう)とある。 「再生」「永遠」と歌っているこ

が、 が後世の詩人に与えた影響は極めて大きい。朝廷に対する忠誠心が空回りしたところから来る憤り、 表す素材として使われ始めた時代について、 らしいものを引き起こす要素が皆無に近いと言っていい。 V のようなところから見ると、 やはり、『楚辞』の時代には月に対するイメージが、まだこの「月と不死」から脱皮して ないように思える。 『楚辞』の月の用例は、 しかし、 明月を自分の報われない忠誠心の比喩としては使わなかったのである。従って、月が望郷、 極めて少ない。右にあげたもの以外に、「被:明月:佩:實璐:「⑤」という表現がある。およそ感情 『楚辞』の時代よりは下ると考えなければならない。 屈原は君主への忠誠を叫びつつ、 不遇を 歎き悲しんだのだ しかしながら、 悲しみを綴った楚 哀愁の心情を 楚辞

232

これとは別に、 注目すべきところがある。 それは、一個人の感情として、 「遊子望郷」の情が楚辞に現れたというこ

辞の精神は、

やがて、

後世の 詩人が 不遇に会ったときの感情表現の 拠り所となったことはいまさら言及するまでもな

V

となのである。「招魂篇」の最後の段に、このように言っている。

目極千里兮 千里のはてを眺めやり

傷 春 心 春の心を傷ませる

魂 来 ああ魂よ都に帰りたまえ

哀

南

江南は哀しいものを

(目加田誠訳 龍渓書舎

故郷を離れた断腸の思いを「望郷」の形によって訴えるものとして、この「招魂」が先駆をなすと言えよう。 「魂を招く」と詠んでいるが、その根底は望郷にある。 詩経にも故郷を懐しむ詩があるのだが、 知識人が不遇に会い、

「望郷」という言葉は、 『礼記』の「奔喪」に見ることが出来る。

(齊衰には郷を望みて哭す、大功には門を望みて哭す、小功には門に至りて哭す、緦麻には位に即きて哭す。)をはいれる。大功望門而哭、小功至門而哭、緦麻即位而哭。

齊衰、大功、 小功、 緦麻とは、 喪服五等の名であって、 死者との親疏関係を表している。この文は、 奔喪の時、

哭する

ら、「遊子望郷」の悲しみとは無関係である。 場所を規定している内容のものである。 したがって、 この望郷は、 文字通り、 郷の方向を見るという意味を持ちなが

「遊子望郷」の情に関する最初の記載は、『史記』 彼の有名な「大風歌」を歌い、 の 「高祖本紀」 にある。高祖が天下を得てから数年経って行、始め

舞いをしたのち、

泪して、

沛の父兄に語ったところなのである。

て故郷へ帰ったとき、

**— 233 —** 

高祖乃起舞、慷慨傷懷、泣數行下。謂沛父兄曰、 (高祖乃ち起ちて舞ふ。 慷慨して懐を傷ましめ、 ななた 泣数行下る。 游子悲故鄉。 沛の父兄に謂ひて日く、 吾雖都關中、 萬歳後吾魂魄猶樂思沛。〈下略〉。 游子は故郷を悲しむ。 吾 関中に都すと

萬歳の後、吾が魂魄は猶ほ沛を楽思せん。)

しかし、 月の顔はまだ覗いていない。 月を素材にして遊子の情を詠んだ詩作と言うと、 やはり、 古詩十九首の一つ、

憂愁不能寐 憂愁して寐ぬる能はず照我羅床幃 我が羅の床幃を照らす明月何皎皎 明月 何ぞ皎皎たる

「明月何皎皎」を思い出すのである。

客行雖云樂 客行は樂しと云ふと雖も攬衣起徘徊 衣を攬りて起きて徘徊す

出戸獨彷徨 戸を出でて獨り彷徨するも不如早旋歸 早く旋歸するには如かず

引領還入房 領を引して還りて房に入れば愁思當告誰 愁思 當誰にか告げん

深は下りて裳衣を沾す

(花房英樹 「文選」詩騒編 集英社

る。 を思うという詩であるにせよ、遠く行っている夫を思う詩であるにせよ、 この詩に出る「我」について、「征夫」と「思婦」と二通りの解釈がある。 この詩には 「望郷」という言葉こそないが、 故里を思う情が十二分に醸し出されている。 この中に流れている哀愁は同質のものと言え いずれの解釈とも成立するが、 古詩十九首と同じように 遊子が故郷

詠 人不知の楽府にも似たような表現がある。

## 傷 歌 行

昭昭素明月

憂人不能寐 輝光燭我牀

輝光我が牀を燭らす 昭昭たる素明 Ø Á

耿夜何長 憂人寐ぬる能はず 耿耿として夜何ぞ長き

耿

略〉

そして、 蘇武の作とされるものに下記のようなものがある。

寒冬十二月 遊子戀故鄉 征夫懷遠路 展に起ちて嚴霜を踐っ 寒冬 十二月 遊子 故郷を戀ふ 征夫 遠路を懷ひ風の隨つて我が堂に聞っ 仰いで浮雲の翔るを視る 俯して江漢の流るるを觀 故郷を戀ふ遠路を懷ひ 也

隨風聞我堂 芬馨良夜發 馥馥我蘭芳 燭燭晨明月

る

芽馨 良立 馥馥たり

・良夜に發り ・良夜に發り ・表り、我が蘭の芳。

燭燭たり

晨明の

月

良友遠離別 各 天の一方に在りを表を表しました。

各在天一方

天の一方に在

Ŧ ħ

ば

相去悠且長 山海隔中州

山海 相去ること悠かにして且 は中州を隔て

一つ長し

嘉會

懽樂 願はくは 殊に未だ央きず 君 令徳を崇くし

願君崇令德 懽樂殊未央 嘉會難兩遇

時に隨つて景光を愛せよ

帝の詩にも見られ

月と哀情との

ては清水の波を視

仰い

では明月の光を看る

廻 洒流

廻りて

西に流

n

披衣起彷徨 彷徨忽已久

白露 我が裳を沾しぬ 彷徨すること忽ち已に久しく

烈烈北風涼 漫漫秋夜長

烈烈として 漫漫として

北 北 秋 夜

涼**き**長 し く

轉不能寐

展轉として寐ぬる能はず

衣を披て起ちて彷徨す

文

距 離 は、 限 りなく近 V もの に な 0 たのである。 傍点の箇所が示している対句と類似した表現がの

正 一從横 正に従横たり

鳴何悲 鳴くこと何ぞ悲し Ē

孤鴈

獨り南に翔る

鬱鬱として悲思多く

願飛安得翼 緜緜として故郷を思

を得ん

欲濟河無梁 ]風長歎息 濟らんと欲するも河に梁無し飛ばんことを願ふも安にか翼

我が中腸を断絶せんとす 風に向かつて長く歎息し

斷絶我中腸

石二首 花房英樹「文選」詩騒編

傍点の所に鑑みると、 靜夜思」は、 のちの六朝の民歌「秋風入窗裡、 このあたりが李白の 「擧頭望山月、 羅帳起飄颺、 低頭思故郷」 仰頭看明月、 の原型であるように思える。 寄情千里光」 (秋風、 **窗裡に入る羅帳起りて飄** もっとも、 李白の

颺す。 わ 刺激は、 れ る。 頭を仰がしめて明月を看、 詩経 無視出来ないと思うのである。 の西周時代から後漢末年、 情を寄す、 千里の光)に基いていると言われているが(®)、魏の文帝のこの詩が李白に与えた 千年以上の歳月が流れたのである。 「望郷の情」を月に象徴化する表現は、 この時代になって、 ほぼ定着したと思

う か。 長い歳月を経て、 その 理 由につい 月が望郷の情を掻き立てる素材となったが、月はどうして、このように遊子の心に反響するのだろ ては、 もちろん不明な所が多いのであるが、 やはり古代人が持つ月に対する信仰が大切な意味を

示唆しているように思える。

古代では、

共同体にとって、

大事な祀りである「月をみる」という行事が、

時代が下るに

--- 237 ---

連れ、 なおも月を祭り、 原始的な意味をしだいに失っていく。 眺めていたのである。『周禮』、 しかし、 「宗伯禮官之職」の 人間はたとえ月を眺めても、 「典瑞」 の段に 寿命なんぞ延びやしないと悟りつつ

王晉大圭、 (王晉大圭、 執鎮圭、繅藉五采五就以朝日。 鎮圭を執り、 繅藉五采五就以て日を朝る。)

る。 に月を夕る)、「月を祭る」習慣を語る記載である。 とがある。 その「朝日」について、鄭玄が註して曰く、「天子常春分朝日、秋分夕月」(天子、常に春分に日を朝り、 他方、 月の神話も月をみる習慣とともに、 語り継がれて来たのであ 秋分

(羿、不死の薬を西王母に請ひしに、姮娥、これを竊む。(中略)姮娥、遂いに身を月に託し、是、蟾壩と為る。)張衡、靈憲篇曰、羿請不死之藥于西王母。 姮娥竊之 (中略)。 姮娥遂託身于月、是為蟾壩。

『淮南子』の 「覽冥訓」にも「羿請不死之藥於西王母姮娥竊以奔月」とある。 しかし、 ここでは姮娥が蟾蜍になったと

は言っていない。

姮娥盗食之、得仙、 奔入月中為月精。

(姮娥之を盗みて食して仙を得、月の中に奔り入りて月精と為る。)

た。 と注が施されている。 伝承が時代を重ねていくうちに、 姮娥の姿も変っていく。 また月の住民も時代とともに増えて来

段成式酉陽雜爼日、 舊言月中有」桂、 有:蟾蜍、故異書言月桂高五百丈、下有:1一人;常斫」之、 樹創隨合。 人姓呉名

の結果は空しさのみである。このような物語を持っている月は自ずと哀愁の顔を持つようになってしまう。 不老不死の身を持つことが出来たと言っても共に住むのは寂寞だけである。 来る日も来る日も桂の木を伐って、 だがそ

めた。 月を眺めては、 る。 V を賞る(タ)ようになってくるのである。そして、 れ 時代が下り、 ば 中国の文人達は、 中央から地方へ流れる人も少なくない。文人達は、 戦国時代から、秦、漢へと、 祭月の意味がすこしずつ薄れていくこととは逆に、 孤独さと悲しみとがこみあげて来よう。 曽てない移動を余儀なくさせられてしまう。 中国の社会は地方分権の国家から中央集権の国家へと変貌していくのであ 祭月、 賞月が習慣化されていくと同時に、 特に満月の夜になると、その悲しみは一層搔き立てられるので 異郷での暮しを歎げかわしく思ったのであろう。 物語の内容は膨む一方である。 郷里を離れ、 中央に出て、 中国の社会も変動を見せ始 出世の道を求める人も 月を祭るよりも、 そして、 月

女歸寧せるも是の日、 いて供え拝す。則ち月光紙を焚き、供えし所を撒つ。散家の人必ず遍し。月餅月果、戚属餽りて相報ゆ。餅に徑二尺なる者有り。 散家之人必遍。 帝京景物略曰、八月十五日祭月、其祭果餅必圓。(中略)家設月光位於月所出方、向月供而拜、則焚月光紙、撒所供、 (帝京景物略に曰く、八月十五日に月を祭り、其祭る果餅は、必ず圓なり。 月餅月果、戚屬餽相報。 必ずその夫家に返る。團圓節と日ふなり。) 餅有徑二尺者。 女歸寧、是日必返其夫家、 (中略)家、月光位を月の出でし所の方に設け、月に向 日團圓節也。

あろう。

また、『燕京歳時記』にも「月餅」の所で、次のように言っている。

大者尺餘、 上繪月宮蟾兎之形。 有祭畢而食者、 有留至除夕而食者、 謂之團圓餅。

(大なる者尺余、 上に月宮蟾兎の形を絵く。 祭り畢りて食する者有り、 留りて除夕に至り食する者有り。 これを團圓 |餅と謂ふ。)

まう。 の孤独、 は、 が 專 まる團圓節という節句が出来るわけなのである。 ある。 圓 |餅や團 やはり家族の団欒を祝するところにあると思われる。 もちろん、 誰ぞ知る人やあらむ。 時代が下れば下るほど、 圓 節 の かつて自分と一緒に月を眺めた家族への気遣いは言うまでもない。 團も圓 P 満月みたいにまるい意味を示す所からもわかるように、 あるとすれば、 節句にあやかって、 あの月に住む姮娥ぐらいのものだろうと、 月とは、 食べ物や飾り物などが多様化されていくのであるが、 家族と一緒に眺めるべきものではないのか。 離ればなれとなっている家族が多かったからこそ、 満月と家族団欒とは密接した関係 思わず月に哀しみを託してし 家族と離れるこ そのもと 堂に集

自 河 南 經 亂 關内阻飢、 兄弟離散各在一 處 因望月有感, 聊書所懷 白 居易

弟兄羇旅各西東 弟兄覉旅して各西東す時難年荒世業空 時難に年荒れて世業空し

骨肉流離道路中 骨肉流離する道路の中田園寥落干戈後 田園寥落たり干戈の後

辭根散作九秋蓬 根を辭し散じて九秋の蓬と作る弔影分為千里鴈 影を弔し分れて千里の鴈と為り

共看明月應垂淚 共に明月を看て應に涙を垂るべし筒材計(12月)

夜郷心五處同

夜郷心五處同じ

家族同士の心と心、そしてその心と故郷とは明月によって結ばれ たのである。

語

説を聞かされ、 に、 仰 その詩作が後世 源していると思う。 のモ るのに対して、「望郷」は文人がおのれの寂しさを詠んでいる。 や伝説が語り継がれるうちに、すこしずつ形成されたと言えよう。 温い光を与へ、 太陽を歌へるモチーフがほとんど完全に欠けてゐることに驚いた。」と言っている。 「拝新月」(1)をテーマに、多くの詩が詠まれ、 じ感情を持つようになる。 ネフスキーが 異郷に散らばった文人達の望郷の素材として、次第に月のイメージが固定化されたのではないだろうか。 哀れを加へる冷き月の光、 伝説がその民族の文学に深く影響することを物語っている。 チーフは への賛美が欠けていること、 日本及び支那には極めて普通であるのに対して、「……ヤールを崇拝するスラヴ思想にとつては、 月を拝む習慣が身につき、除夕の一家団欒と同じように、 へ伝わり、 冷い単調な自然に包まれて、 「月と不死」という一文に(10)、 古代人の月に関する信仰と共同体で月を眺める習慣、 文人が幼少時代からそのような月のイメージを持つ文学作品を学習することによって、 このようなことは、 さらぬだに哀れを感ぜしめる月には、 ロシア韻文の中に、 戯曲の題にもなっている。「拝新月」が主に、女性を主人公として詠 唯一の喜び、 支那や日本の韻文に いまでも繰り返されている。 月は無縁なものであること、これはまさに、 唯一の慰藉を齎らす太陽は、 いずれも、 中国の 「望月思郷」という詩作がある一方、 何の縁もなかった。」と言う。 「露西亜の韻文の特徴である所の、 「月の文学」も、 中秋の日に家族が一堂に集ることの大切さを そのもとは、「月をみる」というところに起 そして若干の哀愁を帯びた神話伝説を背景 現在の子供も、 また、 月に対する信仰、 懐かしくも心近きものである 感傷的なイメージを持つ月 文字を知る前 自然現象に対する信 中国の韻文の中に、 唐宋の代には 言から月 或い やが んで は神話 輝 月に け

覚える。そして、小学校に入ってから、最もはやく教科書に登場する詩は、李白の「静夜思」である。このような教育 をうけた人々は、 復再学習が重なったからこそ、月すなわち望郷という感情が古代より来たりて、現在に至る迄、 当然親元、 郷里を離れて生活するとき、寂しさは満月によって刺激助長されるのである。こうした反 中国人の心の中で綿

こと勿論である。 なお、本文では日本の月に対する感情は、 月に対する信仰、 月の歌の表現などの異同について、 中国のそれと似ていると指摘したが、すべての面で同一であるとは言えな 今後の課題にしたいと思っている。

として消えることがないのだと思う。

- 1 楊柳續考 -信仰から別離の象徴へ――『藝文研究』昭和六十三年、第五十三号。
- 『説文解字』に、「望、月滿也」の注に「此與望各字、望從聖省聲、今則望專行而朢廢矣。」また「望」の注に「按望以聖為 違いない。 望以望為義、其為二字較然也、而今多亂之。」とある。確かに本来違う字ではあるが、 その語源は同一であると見て間
- (3) 白川靜著『詩經』、中公新書、昭和四五年。
- 4 例えば『焦氏筆乘』云、「『月出』、見月懷人、能道中事。太白『送祝八』、 落月滿屋梁、 猶疑見顏色。(中略)此類甚多、大抵出自『陳風』也。」 若見天涯思故人、 浣溪石上窺明月。 子美『夢太
- 5 「拜新月」という風習について、 澤田瑞穂著「拝新月詞話」(『中国古典研究』二〇号、 文化』特集号「月と潮」、昭和六十年)に詳しい。それぞれの論文は、 研文出版の『閒花零拾』(昭和六十一年)、 承と説話』(昭和六十三年)に収録されている。 昭和五一年)「伝承の月」 中国の傳 (『自然と
- 6 の「涉江篇」に出ている。ここの明月は月ではなく、 明珠(珍珠)を意味する。

『史記』「高祖本紀」、「高祖十二年十月、高祖巳撃布軍會甄、布走令別將追之、高祖還歸過沛、

留置酒沛宮云々」とある。

8 鈴木虎雄譯解『玉臺新詠』(岩波書店、昭和二八年)と、大野実之助著『李太白詩歌全解』(早稲田大学出版部、 昭和五五年)

二書には、ともに言及されている。

- 9 「賞月」の習慣はいつから始まったのかが不明であるが、『晉書』、「文苑、 支宏傳」に「少孤貧、 渚、秋夜乘月、率爾與左右微服泛江。(下略)」とあるのを見ると、晉の時代にはすでにあったように思える。 以運祖自業。 謝尚時鎮牛
- $\widehat{\underline{10}}$ 『月と不死』、N・ネフスキー著、岡正雄編、平凡社、東洋文庫一八五、昭和四六年。

11 記 吉田隆英「唐宋拜月考」(日本中国學會報、第三十四集、昭和五七年)に詳しい。注(5)も合わせさ参照されたい。

本稿は一九八八年六月二五日の藝文学会研究発表会に於ける口頭発表を補訂したものである。